

LEAP 診察室

vol.146

【今回のテーマ】頭痛を起こす鼻の病気

●教えてくれたドクター

鹿児島県保険医協会会員
南さつま市
ふくい耳鼻咽喉科クリニック

福岩 達哉先生



頭痛は私達が日常生活の中でよく経験するものですが、その原因のいくつかは耳鼻咽喉科の病気が係わっている場合があります。

副鼻腔炎と頭痛

顔面の骨の中には副鼻腔と呼ばれる空洞があり鼻とつながっています。副鼻腔に細菌が侵入して増殖すると、副鼻腔内の粘膜が腫れたり膿がたまったりします。これが副鼻腔炎であり以前は蓄膿症と呼ばれていました。副鼻腔炎になると三叉神経の刺激症状が発生して頬や額(ひたい)の痛みを感じるようになります。さらに三叉神経の関連痛で頭の全体的な疼痛や後頭部痛などが出ることもあります。

アレルギー性鼻炎と頭痛

アレルギーの原因であるアレルギーが鼻粘膜に到達すると、アレルギー反応が起きて鼻粘膜が腫れるため鼻づまりを



アレルギー性鼻炎は近年増加傾向にあります。アレルギー性鼻炎で頭痛を訴える患者さんも増えており、特に子供のアレルギー性鼻炎では、鼻症状ではなく頭痛が主な訴えである場合が多いです。

耳鼻咽喉科領域の腫瘍と頭痛

上記2つの病気以外に、骨や脳に悪影響を及ぼす怖い病気もあります。鼻とノドのつなぎ目を上咽頭といいますが、ここに発生する悪性腫瘍(癌)を上咽頭癌といいます。上咽頭は口を開けただけでは見えない場所なので癌ができて最初は見付かない場合が多いですが、進行すると脳を支えている骨(頭蓋底)に入り込んで頭痛を起こすようになります。また副鼻腔のうち頬部にある上顎洞も癌がでやすい場所ですが、上顎洞が骨に入り込むと頭痛や頬部痛を起こします。

頭痛の検査方法

耳鼻咽喉科における頭痛の診察は、まず鼻の粘膜を診察して異常がないか確認することから始まります。より詳細に診察するためには電子内視鏡装置を用いて、鼻の奥深くまで観察することが重要です。

また副鼻腔炎の検査として単純レントゲン撮影がありますが、頭痛と関連が深い副鼻腔のうち、骨の奥深くにある蝶形洞という部位はレントゲンで診断することが困難です。さらに上咽頭の診断もレントゲンだけでは情報不足であり、これら副鼻腔炎や腫瘍の有無を詳細に調べるためには、CTスキャンによる画像診断が極めて有効です。

治療について

頭痛と鼻づまりを訴える患者さんに対して副鼻腔CT撮影を行った結果、副鼻腔に全く異常がない例がしばしば見受けられ

ます。そのような患者さんでもアレルギー検査にてアレルギー性鼻炎が見つかった場合、アレルギーの治療で頭痛が消失することはよく経験します。

「頭痛がするので頭痛薬を飲む」だけではなく、まず適切な診察と検査で頭痛の原因を調べる必要があります。鼻症状を伴う頭痛については、耳鼻咽喉科専門医の受診をお勧めします。



今回のテーマに対する疑問・質問や、ドクターに聞きたいカラダ・歯の悩みなど、このコーナーではご意見を募集中です。

〒892-8505
鹿児島市錦江町8-21
E-Mail: leap@eikou-group.co.jp
「LEAP診察室」係まで

お送りいただいたメール・FAX・ハガキなどに含まれる個人情報は南日本出版(株)が管理し、原則としてお送りいただいた企画でのみ使用いたします。